

第676回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2025年9月度 ——

◇ 議題

<ラジオ番組>

第62回ギャラクシー賞 ラジオ部門 大賞受賞作品

「MANDAN」

(放送日時：6月28日(土)21:00~23:00)

◇ その他

2025年9月16日(火)開催

九州朝日放送株式会社

第676回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2025年9月16日(火) 15時55分～16時55分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 6名

委員長	上野	恵梨奈
委員	副田	智幸
委員	サーズ	恵美子
委員	小柳	美佳
委員	森	慎二
委員	泗水	康信

欠席委員数 2名

副委員長	山根	久資
委員	林田	真心子

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	森	君夫
取締役 報道制作局長	大迫	順平
執行役員 総合編成局長	柴田	高宏
総合編成局 編成戦略部 ラジオ事業部長	坂本	守
KBC MoooV 制作部ラジオチーム 部長代理 (番組プロデューサー)	米寄	竜司
総合編成局次長 兼 番組審議会事務局長	武藤	礼治
番組審議会事務局 (総合編成局)	松永	俊郎

4. 議題

(1) ラジオ番組

第 62 回ギャラクシー賞 ラジオ部門 大賞受賞作品「MANDAN」

(放送日時：6月28日(土) 21:00～23:00)

(2) 9月・10月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告

(3) 7月・8月 視聴者・聴取者応答状況の報告

(4) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- 炊飯器の話題で番組が始まり、実際に炊飯器を購入して、お米を炊き実食する一連のことが2時間の番組内で繰り広げられ、飽きることなく番組を楽しめた。
- 息子の夢を母親であり番組パーソナリティーのきょんちゃんが熱弁し、その思いが放送中に目まぐるしく動く様が印象的でぐんぐんと引き込まれた。
- 番組パーソナリティーの話題がとても身近で共感が持てた。誰も悲しまず、不快な思いもしない、終始楽しめる内容だった。
- プロデューサーのアドリブがライブ感を演出し、ダイナミックな展開を実現していた。わくわくしながら番組を聞くことができた。ラジオの醍醐味が詰まった番組だった。
- きょんちゃんとハニー、スタッフ、リスナーの一体感が印象的だった。制作陣のチームワークのよさが伝わり安心して聞くことができた。
- 長時間の番組を、炊飯器の話題を中心に繰り広げていくパーソナリティーのトークはさすがだと感じた。お米が炊き上がる様子などの情景が目につかんだ。
- 炊飯器やお米について、リスナーから多くの情報が寄せられたことにより、内容に偏りがなく、安心感があつた。リスナーと一緒に番組を作り上げる「ラジオらしさ」を感じた。
- 炊飯器以外の時事ネタも挟まれていて有意義だった。そうした話題が番組の良いアクセントになり、全体を間延びせずに聞くことができた。
- 以前ははがきや電話で寄せられていたリスナーの声が、メールやSNSに変わったものの、番組の構成やスタイルは変わっておらず、ノスタルジックな気持ちにさせられた。
- ラジオだからこそ想像して思いを馳せることができた。生放送だからこそ耳を離せないドラマチックな展開だった。今後のラジオ番組への興味にもつながった。

などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- 10万円もの高級炊飯器を即決で購入することについて、無駄遣いだと思ったリスナーもいたのではないかと。一部のリスナーは不快に感じたかもしれない。
- 炊飯器はプロデューサーが自費で購入したとのことだが、制作者が個人の所有物を提供し

たり、出演者がプライベートを開示することについて、どう捉えているのか気になった。

- 「ケーズデンキ」や「タイガー魔法瓶」は番組のスポンサーなのか。スポンサーではない場合、他の番組スポンサーへの配慮は大丈夫だったのかと気になった。
- 急きょ内容を変更したとのことだが、当初はどのような想定だったのか。また、当初準備していた内容はボツになったのか気になった。
- パーソナリティーの少しオーバーなリアクションが煩わしく感じた。
- 備蓄米を高級炊飯器で炊くとどうなるかチャレンジしても面白かったのではないか。
- 炊いたお米を「お母さん、よそって」という場面は、女性が家事をするものと受け止められやしないか。表現に配慮が必要だと感じた。
- ラジオでは一般リスナーと電話をつなぐことがあるが、「何を言い出すか分からない」というようなリスクはないのか気になった。
- 去年12月に放送した内容を再編集したものなので季節のズレを感じた。番組のことを知らないリスナーにむけて、少し補足があってもよかったのではないか。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、制作担当者からは、

- 本作は、リスナーに日常のありふれたもので「ドキドキ」と「わくわく」を感じてもらいながら、パーソナリティーの魅力が伝わればと思い制作した。
- 高級炊飯器を購入することについてクレームもあり得ると悩んだが、オープニングの場面で絶対に面白くなるかと確信したため、覚悟を決めて購入した。
- プライベートの開示について、共感を得るためにはある程度自分の考えをしゃべる必要もあると思っている。強制はしないが、どこまで話すか、パーソナリティーに任せている。
- 「ケーズデンキ」や「タイガー魔法瓶」は当時番組のスポンサーではなかったが、競合するスポンサーもなかったため、誰にも迷惑が及ばないと判断した。
- ダイナミックさを演出するために、当初想定していた話題を変更することはままある。今回放送できなかった内容は、翌週に放送した。
- 一般リスナーと電話をつなぐ場合、スタッフが事前に話して人物を確認している。リスクがないとは言い切れないが、ラジオの生番組において、欠かせない演出だと思っている。
- 本作が再編集モノであることをもっと紹介することも検討したが、番組に没頭できなくなると考えて見送った。
- ラジオはパーソナリティーの力が大きいメディアだと言える。「MANDAN」では、きょんちゃんとハニーの高い能力に自信を持っている。
- KBCラジオではより良い放送を続けるために、今後もパーソナリティーの育成と人材探しに力を入れていきたい。

などの説明をしました。